二〇一六年一二月二〇日（忘年句会　参加者一九名）

裸木にひつかかりたるレジ袋　うつぎ
急ぎきて五叉路に迷ふ師走かな　うつぎ
極月といへどわれらは吟行す　かかし
赤文字の旗が氾濫年の市　かかし
欄干に押しくらをする寒雀　こすもす
仏具屋にセールなさそう年の市　こすもす
摩天楼ビル抽んでし枯木立　ぽんこ
浮島の松要とす冬景色　ぽんこ
新藁となりし知恵の輪くぐりけり　はく子
蒼天へ千鈴散らし楝の実　はく子
水脈重ね不即不離なる番鴨　ひかり
色変へぬ松のせり出す鏡池　ひかり
花舗占めてポインセチアの鉢並ぶ　宏虎
寒禽の鋭声谺す茶臼山　宏虎

葉牡丹の大中小と花舗占むる　満天
知恵の輪をくぐりこれより納め句座　満天
飛び石のひとつは臼や庭枯るる　明日香
四阿と枯れたる文字や冬の苑　せいじ
着膨れて鐘楼を守る寺男　たか子
手に触るる転法輪の冷たさよ　やよい
色鳥来墓標の義士の寧かれと　よう子
商ひの道にはみ出す年の市　わかば

吟行句会みのる選

二〇一六年一二月二〇日（忘年句会　参加者一九名）